

2個の生成元を持つ free IN-algebra  
& free ICN-algebra の決定

東大 理 佐藤 雅彦

よく知られたこととして、直観主義命題論理は決定可能であり、任意に論理式を与えたとき、それが LJ の定理であるかどうかを決定する program もしくは存在し得る (例として古森 [4], 嶋田 [7])。また Piego [2], McKay [5] に於いては、有限個の命題変数を固定するとき、それらで生成される ICN-formula ( $\forall$  を含む formula) 全体から作られる Lindenbaum algebra は有限であることが分る。従って、 $\alpha$  Lindenbaum algebra の構造は、 $\alpha$  program を使えば原理的には <sup>決定</sup>可能である。しかし  $\alpha$  として、計算時間の問題から現実的には、ほとんども不可能である。以下では、代数的な方法によつて、 $\alpha$  Lindenbaum algebra の構造を簡単に決定する方法を与え、計算機による計算結果を簡単に述べらる。

Def. 1 (I-algebra)  $A = (A, 1, \rightarrow)$  は以下の条件を満たすとき I-algebra とよばれる。  $F \subseteq A$  で  $1 \in A$  で、 $\rightarrow$  は  $A$  上の binary operation とある。

$$(I1) \quad p \rightarrow (q \rightarrow p) = 1$$

$$(I2) \quad (p \rightarrow (q \rightarrow r)) \rightarrow ((p \rightarrow q) \rightarrow (p \rightarrow r)) = 1$$

$$(I3) \quad p \rightarrow q = q \rightarrow p = 1 \Rightarrow p = q$$

Def. 2  $F \subseteq A$  は次の条件を満たすとき、 $A$  の filter とよばれる。

$$(F1) \quad 1 \in F$$

$$(F2) \quad p \in F, p \rightarrow q \in F \Rightarrow q \in F$$

$F$  による  $A$  上の relation  $\sim_F$  は、 $p \sim_F q \Leftrightarrow p \rightarrow q \in F$ 、 $q \rightarrow p \in F$  による定義から、 $\sim_F$  は  $\rightarrow$  と compatible な equivalence relation となるから、自然な方法で  $A/\sim_F = A/F$  は I-algebra となる。また、 $p \leq q \Leftrightarrow p \rightarrow q = 1$  と定義すれば、 $\leq$  は  $A$  上の partial order を定める。1 は  $\leq$  の order の最大元である。

Riego [2] は有限生成の free I-algebra が有限であることと証明し、その構造を決定する constructive な方法を示した。以下に定義する IN-algebra & w ICN-algebra について

また Diego の証明は  $\exists a$  が成り立ち、有限生成の free IN (ICN)-alg. は有限であることが分る。しかし、 $\forall a$  の証明は 2 回の生成元を移す free IN (ICN)-alg. に Diego の方法で計算すると、相当な長時間計算になることが予測された。そこで、以下では IN (ICN)-alg. に特有用な性質を利用して、より効果的な方法を考へた。専大数学教室の計算機 Tosbac 3300 を使った、 $\exists a$  の方法での計算時間は約 10 時間であった。

Def. 3 (IN-algebra)  $A = (A, 1, \rightarrow, \neg)$  は次の条件を満たすとき IN-algebra であるという。ただし  $\neg$  は  $A$  の unary operation である。

$$(I1), (I2), (I3)$$

$$(N1) \quad (p \rightarrow \neg q) \rightarrow (q \rightarrow \neg p) = 1$$

$$(N2) \quad \neg p \rightarrow (p \rightarrow q) = 1$$

Th. 4 (Horn [3])

$A$  が IN-algebra  $\iff A$  に最小元  $0$  を移すと I-algebra となり  $p \rightarrow 0$  を定義した。

Def. 5 (ICN-algebra)  $A = (A, 1, \rightarrow, \neg, \wedge)$  は次の条件を満たすとき ICN-alg. であるという。ただし  $\wedge$  は

$A$  は a binary operation である。

(I1), (I2), (I3)

(N1), (N2)

(C1)  $(p \wedge q) \rightarrow p = 1$

(C2)  $(p \wedge q) \rightarrow q = 1$

(C3)  $(p \rightarrow q) \rightarrow ((p \rightarrow r) \rightarrow (p \rightarrow (q \wedge r))) = 1$

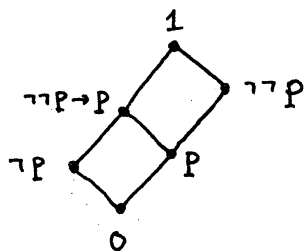
Th. 6 (Horn [3])

$A$  が ICN-alg.  $\iff A$  は IN-alg. である  $p \wedge q$  は  $\inf\{p, q\}$  であるとして定義された。

$n$  個の文字  $P_1, P_2, \dots, P_n$  によって生成された free ICN-alg.

は  $\lambda_{ICN}(n)$  (あるいは単に  $\lambda(n)$ ) と書くことにする。

Nishimura model [6] によって、 $\lambda_{ICN}(1)$  は簡単に合リ次のように存在する。



である場合  $\lambda_{ICN}(1) = \lambda_{IN}(1)$  である。つまり  $\lambda_I(1) = \begin{matrix} 1 \\ | \\ P \end{matrix}$  である。

$\lambda(m)$  は Diego の方法で finite であることが分るが,  $\lambda(m)$  と  $\lambda(n)$  の間に  $\lambda(m) \leq \lambda(n)$  であることは McKay [5] に示されている。一方 finite distributive lattice については  $\lambda(m) \leq \lambda(n)$  であることは distributive lattice であること (Birkhoff [1] 参照)。

partially ordered set  $K$  に対して  $\mathcal{O}_K \subset \mathcal{P}(K)$  と次のように定めれば,  $\mathcal{O}_K$  は  $K$  上の topology を定めた。

$$L \subset K \text{ である } L \in \mathcal{O}_K \iff (p \in L, q \leq p \implies q \in L)$$

$\mathcal{O}_K$  の元の包含関係  $\subset$  と順序  $\leq$  とは一致する。すなわち  $L \subset M \iff L \leq M$  である。

よって  $\mathcal{O}_K$  は pseudo-Boolean algebra であり, 従って distributive lattice である。また, lattice  $P$  の元  $a$  は  $a = p \vee q \implies a = p$  or  $a = q$  となることを join irreducible であるとする。

Th. 7  $P$  は finite distributive lattice であるとき,  $0$  を除いた  $P$  の join irreducible 元全体を  $K$  とすれば

$$P \cong \mathcal{O}_K$$

Def. 8  $\mathcal{I}$ -algebra  $P$  であるとき,  $P - \{1\}$  が最大元 (2 未満) を持たないとき  $P$  は indecomposable であるとする。

Th. 9  $P$  は finite distributive lattice であるとき,  $p \in P$  に対して

次に  $\mathcal{F}$  には filter  $\mathcal{F}(p)$  と  $\mathcal{F}(1)$ ,

$p$  は  $0 \neq p < \text{join irreducible}$

$\Leftrightarrow P/(p)$  は irreducible

以下,  $P = \lambda_{\text{ICN}}(m)$  ( $m \geq 1$ ) を fix (参考) した。  $P$  上で決定された  $\mathcal{F}$  は, Th. 7 により  $P$  の nonzero join irreducible element 全体  $K$  上決定された  $\mathcal{F}$  である。  $p \in K$  かつ  $\mathcal{F}(p) = \{1, 2\}$  である。  $\mathcal{Q}_p = P/(p)$  は irreducible である。  $R_p = \mathcal{Q}_p / \{1, 2\}$  と  $\mathcal{F}(p)$  である。  $\mathcal{F}(p) = \{1, 2\}$  である。  $\mathcal{F}(p) = \{1, 2\}$  である。

Th. 10  $\exists \{g_1, \dots, g_{m-1}\} \subset R_p$  s.t.

$R_p = \{g_1, \dots, g_{m-1}\}$ .  $\mathcal{F} = \mathcal{F}(p)$ ,  $G \subset R_p$  かつ  $\overline{G}$  は  $\mathcal{F}$  上生成された  $R_p$  の ICN-subalgebra.

(証明)  $R_p = \{1\}$  ならば  $R_p = \overline{\emptyset}$  である。  $R_p \cong \mathbb{Z}$  かつ  $\mathcal{F}(p) = \{1, 2\}$  である。  $\mathcal{Q}_p \cong \mathbb{Z}$  である。  $\mathcal{Q}_p = \mathbb{Z} \setminus \{0, 1\}$ 。  $P$  の free generator  $p_1, \dots, p_m$  に対し,  $\varphi_p: P \rightarrow \mathcal{Q}_p$  は natural map である。  $\mathcal{F}(p) = \{1, 2\}$  である。  $\mathcal{Q}_p = \{\varphi_p(p_1), \dots, \varphi_p(p_m)\}$  である。  $\mathcal{F}(p) = \{1, 2\}$  である。  $\mathcal{Q}_p$  の ICN-subalgebra である。  $\mathcal{F}(p) = \{1, 2\}$  である。  $\mathcal{Q}_p - \{2\} \subseteq \{\varphi_p(p_1), \dots, \varphi_p(p_{i-1}), \varphi_p(p_{i+1}), \dots, \varphi_p(p_m)\}$ 。  $\mathcal{Q}_p - \{2\} \cong R_p$  である。  $\mathcal{F}(p) = \{1, 2\}$  である。

$\lambda(2)$ ,  $K$  の構造を決定する  $T$  中には,  $p \in K$  に対して,  
 $Q_p = \langle Q_p; \varphi_p(p_1), \dots, \varphi_p(p_m) \rangle$  なる組を考へる。また  
 $S$  は任意の irreducible ICN-*alg.* とし,  $\{s_1, \dots, s_m\} \subset S$  が  $\overline{\{s_1, \dots, s_m\}}$   
 $= S$  を満たす  $\lambda(2)$ ,  $\mathcal{S} = \langle S; s_1, \dots, s_m \rangle$  なる組合体の  
 class  $\mathcal{S}$  を考へ,  $\mathcal{S}$  上の *pseudo-order*  $\leq^*$  を  $\lambda(2)$  により定め  
 る。

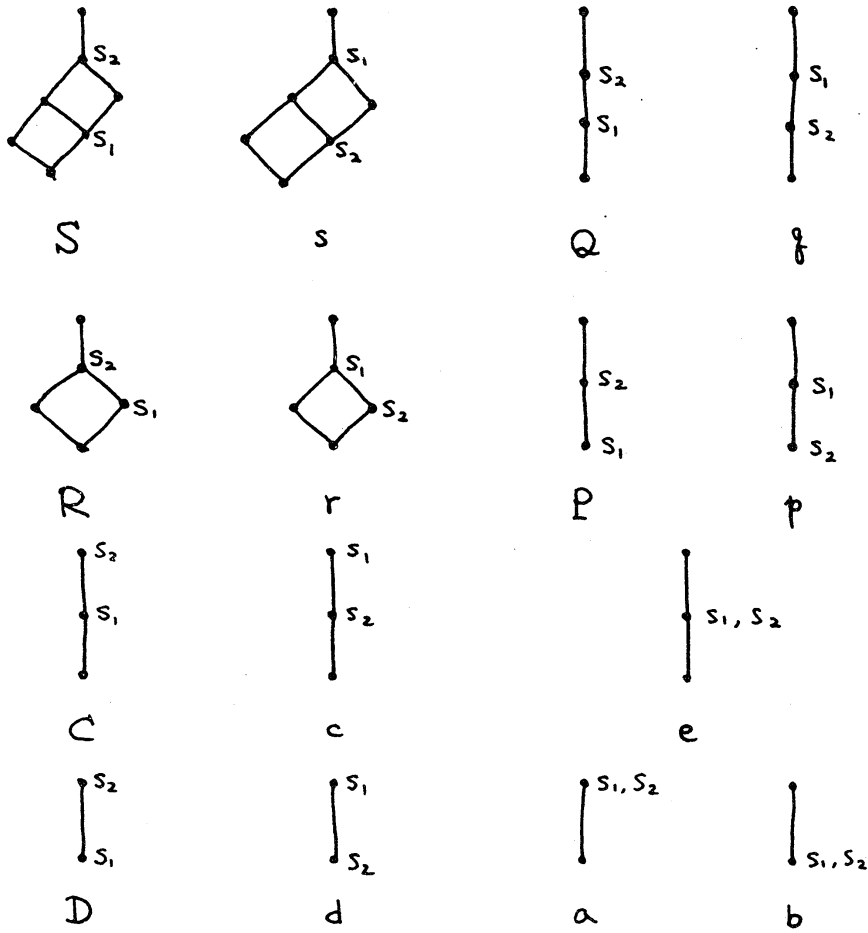
$$\mathcal{S} = \langle S; s_1, \dots, s_m \rangle \leq^* \mathcal{T} = \langle T; t_1, \dots, t_m \rangle$$

$\Leftrightarrow$   $f(t_i) = s_i$ :  $T$  上の homomorphism  $f: T \rightarrow S$  が存在する。

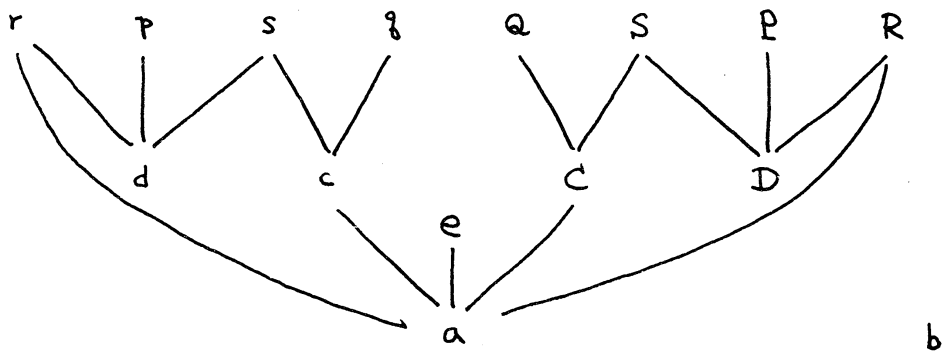
$p, q \in K$  とすれば,  $p \leq q \Leftrightarrow (p) \supset (q)$  である。  
 $\text{Ker } \varphi_p = (p)$  等に注意すれば, 更に,  $p \leq q \Leftrightarrow$

$Q_p \leq^* Q_q$  であることがわかる。 $\leq^*$  による  $\lambda(2)$  induce する  
 equivalence relation  $\equiv$  とすれば,  $\mathcal{S}/\equiv$  は ordered structure  
 となり,  $P$  が free であるから, 各同値類の代表元として  $Q_p$   
 の形をしたものが  $\equiv$  unique にとりよることができ, 故に  $\mathcal{S}/\equiv$   
 $\cong K$  となる。また, Th. 10 の証明から,  $Q_p / \{1, 2\}$  は  $\lambda(m-1)$   
 の homomorphic image となることもわかる。故に  $\lambda(m-1)$  が  
 知られておれば,  $Q_p$  の形はすべて決定できる。

以上の議論を  $\lambda(2)$  にも適用すれば,  $\mathcal{S}/\equiv$  の代表元  
 は次の 15 組であり, かつ  $\equiv$  である。但し, 各組の下には  $K$  の元  
 の名前が書かれており,  $p \in K$  に対して,  $\varphi_p(p_1) = s_1, \varphi_p(p_2)$   
 $= s_2$  としよ。



$\exists T = K$  a order is  $\exists a \neq b = T_2 3$ .





$\lambda(2)$  a generator  $\in p_1, p_2$  とすれば,  $\lambda(2) = \{p_1, p_2\}^{ICN}$  と表わす

$$p_1 = c \vee d \vee a$$

$$p_2 = C \vee D \vee a$$

と表す。  $\lambda(2) = \{p_1, p_2\}^{ICN}$  と表わすが,  $\lambda(2) = \left( \overline{\{p_1, p_2, 0\}^I} \right)^C$  とも  $\overline{\{p_1, p_2, 0\}^I} \cong \lambda_{IN}(2)$  と表わすことが容易に分る。計算機を用いて,  $\overline{\{p_1, p_2, 0\}^I}$  を計算し, 次に conjunction に閉じた closure を計算した。

$\lambda_{IN}(2)$  は 518 個,  $\lambda_{ICN}(2)$  は 2134 個あることが分った。

$\lambda_{IN}(2)$  の元を, LK の定理と存するものは 126 個であった。

次頁に,  $\lambda_{IN}(2)$  の元の最初の 20 個と最後の 18 個を示す。

#### References

- [1] G. Birkhoff: Lattice theory, A.M.S. Colloq. Publ., vol. 25, 1948
- [2] A. Diego: Sur les algèbres de Hilbert, Collection de Logique Mathématique, Série A, no. 21, Paris, 1966
- [3] A. Horn: The separation theorem of intuitionistic propositional logics, J.S.L., 27 (1962), 391-399
- [4] Y. Komori: Logics and their models (Japanese), Master thesis, Univ. Tokyo, 1972
- [5] G. G. McKay: The decidability of certain intermediate propositional logics, J.S.L., 33 (1968), 258-264
- [6] I. Nishimura: On formulas of one variable in intuitionistic propositional calculus, J.S.L., 25 (1960), 327-331
- [7] K. Shimada: Master thesis, Tsuda College, 1973

